

Title	太平洋戦争をめぐる
Sub Title	On the Pacific War
Author	内山, 秀夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No. 特別号-II (1990. 3) ,p.192- 202
JaLC DOI	10.14991/001.19900302-0192
Abstract	
Notes	中村勝己教授退任記念論文集：東洋および日本経済史・思想史
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900302-0192">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900302-0192</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 太平洋戦争をめぐるって

内 山 秀 夫

はじめに

1 「夢の凶南」から「奪われたる亜細亜」へ

2 脱亜入欧から脱欧入亜へ

おわりに

### はじめに

日本の近代が西力東漸に触発されて画期され展開していったことはほぼたしかである。もちろん、その外発性に対応する内発性あるいは主体性の意味をここで否定する必要はない。それは「開国」というテーマをめぐるって常に副旋律としてまつわりついた攘夷の意味とその転回をみれば、容易に見当がついてくる。つまり、開国すれど独立が、どのようなありうべき選択肢を含みうるか、あるいはその選択肢は他のいかなる選択肢とからみうるのか、あるいは他の選択肢と絶対に切断されることで、唯一可能性を誇示しうるか、という脈絡の問題がそこに浮きあがってくる。

それはたとえば福沢諭吉の文明論の行先きに東アジア連盟論があり、その現実的挫折に結果した脱亜論がありながら、いやそうであったればこそ、一身一国独立のエートスの涵養の切実さが浮きあがってくるところに結ぶのか、ヨーロッパ帝国主義の攻囲の中で、防衛的近代化から攻撃的近代化に転換することで、みずから帝国主義に一意的に挺身する志向に身を寄せるのか、といったテーマを内包しているはずである。いずれにしても、その選択肢のヴァリエティはそれぞれが《政治》として聳立し、あるいはその時どきの国是として、あるいは民間の運動として、その《政治》が日本近代政治史を曲折した。しかし、私たちはその結論を今なお発見していないことはたしかなのである。

というのは、脱亜と入欧とが、脱亜入欧とフレーズ化されてあたかも日本近代に定着したかのようには錯覚されたまま、私たちの今は、世界の中の日本に結びつけられながら、アジアの中の日本に便宜的に執着する野放図を生きてはいないか、とする疑問が色濃く存続しているからである。言いかえれば、経済成長が先進諸国の驥尾についていた帝国日本は、経済大国日本の現在と通底して、「世界」と「アジア」を自在に使いわけ、その自在性が逆に私たちのアイデンティティ核を曖昧なままにして、漂泊的周辺人たらしめているのではないか。そして、その漂泊性をつなぎとめるアパラスとしての大日本帝国と日本国が、前者は凝縮された実体としての天皇制国家として、後者は

もっとルースな機構ではあっても、日本システムとしてはまことに堅固な実質をつくりだしている。かくして、いずれにしても、この漂泊は「自由」に転換できないところで、天皇のまえの国民的平等と、日本国憲法のまえの国民主権の平等に押し詰められているのではない。

この日本近代の壮大な虚構が民主主義の政治化という支配の正統性になっている、そのポイントに想到したとき、前述した臣民と国民とを——連続的にか断続的にか——つなぎとめるべき歴史的事実としての太平洋戦争があぶりだされてくるのではないか。それはいづれにしても、あやまちは二度とくり返さない、といった総括では処理しえない負荷であることはたしかである。つまり、個々の日本人が戦争責任のポイントだけでそれにつながってはいられないことがらではないのだろうか。それはまた分析的にも解析的にも結着がつかず、国定＝検定教科書によって確定されず、科学的にも検証できず、一歩まちがえれば全否定か全肯定かのニヒリズムにおちいる可能性のあるテーマでしかない。

このニヒリズムを回避するには、しからば、部分否定と部分肯定とを重合することで、太平洋戦争の評価を進める道しかないのだろうか。私にはそうは思えない。そこにはまちがいなく、私たちの戦争の思想、言いかえれば不戦の思想と、人間の秩序への思想がなくてはなるまい。本論で私はそれを語ろうとするのではない。むしろ、全肯定の情念と、部分否・肯定の論理とが私たちにもちうる非説得性を述べるにとどまる。それは、戦争・不戦・秩序のトリニティが過去・現在・未来にわたる、いわば断ち切れることのない、私たち日本人の、そしてまた人間の創造＝想像力の領野に属することがらであり、それあればこそ、一人ひとりの昨日と今日と明日が人間史参加のモメントでありうる、と思うからである。

## 1 「夢の凶南」から「奪われたる亜細亜」へ

「太平洋戦争は、日本対米、英、オランダという帝国主義戦争の他に、日本対半植民地および植民地との関係があり、著者は後者を『もう一つの太平洋戦争』と呼んで問題を掘り起している。こういう観点を日本人自身が持ち出すことに、まだためらいがある。恐らくアジアの人々も愉快に感じないだろう。だが当事者の一人だった昭和天皇がなくなれば、新しい時代になった今、第二の太平洋戦争をクールに見直すべき時期に来ているのではないか。」(大谷健)

このコメントは、私にただちに大アジア主義－アジア解放を思いおこさせた。それは言うてしまえば、菅沼貞風の「凶南の夢」や満川亀太郎の「奪われたるアジア」の覚醒と日本を中心とするアジアの独立であり、その中での日本南進論の焼直しと直観させた。そのバイアスは大谷健が対象とした信夫清三郎の著書を読んでも、大谷が指摘した「第二の太平洋戦争をクールに見直す」ことにはほとんどなっておらず、むしろ「第二の太平洋戦争」がほとんど成立していないことを確認するところで強まってしまった。

信夫の「序」によると、1986年9月に日本国際政治学会が創立30周年を記念して開催した国際シ

ンポジウム《アジア太平洋地域の国際関係——1945年～85年》で、太平洋戦争が東南アジア民族運動にあてた衝撃をめぐる論争があり、理事長永井陽之助の総括は、そこでの係争点が以下の如くであったと述べている。「日本の掲げた『大東亜共栄圏』のデザインの背後に、露骨な帝国主義的意図がかくされていたにもかかわらず、日本軍の占領は、旧白人支配層の威信を失墜させ、現地民族の占領行政への参加、青年の軍事訓練などを介して、現地の民族独立闘争を強化する結果となった。すくなくとも戦争と占領は、現地の民族主義運動を“加速化”させる“触媒”の役割を果たした。だが、この触媒説が、日本の侵略戦争を正当化する論理として韓国、東南アジアの一部参加者を刺激した。これが誤解であることは明白としても、韓国併合に関する藤尾発言とからみあい、『太平洋戦争から日本人はいったい何を学んだのか』の声がフロアから上った。われわれは、その反応を事実として真剣にうけとめる必要がある。」(強調=内山)

前出の大谷のクール見直し論がこのような論脈で報告され、「すくなくとも」触媒機能を果たしたとする日本側の論旨が誤解されなかったからこそ、韓国人や東南アジア人に反発されたのではなかったのか。信夫の著書にかんする書評をここで展開するつもりはないが、少なくとも彼が“触媒”説に立ちながらも、帝国日本の占領政策が、旧植民地主義と新植民地主義の両面をもって、「<対支政策>も、<大東亜新政策>も、所詮は<一大変革>も<新しい意識>もともなわずに<旧植民地主義>と<新植民地主義>のあいだを往き来していた」(viページ)とする結論めいた指摘は、私を納得させない。つまり、“触媒”であったか否かは、植民地人側が評価すべきことであり、私たち侵入者側がクールに自己評価すべきものではないのではないのか、というのが私の疑問なのである。

私はどちらにしても、たとえ太平洋戦争であれ大東亜戦争であれ、それが帝国膨脹としての《南進》論線上にしかないことを、何よりもまず指摘することではじめたい。その場合、南進論の系譜をたどるつもりはない。ここに提出したいのは菅沼貞風の“図南論”である。彼の「変小為大転敗為勝」としての「図南の夢」は明治21年に書かれた。発表されたのは昭和15年、彼の『大日本商業史』が重版された時に付載されたと言う(岩波文庫版、平泉澄解説による。ただし昭和54年に復刻された五月書房版には収載されていない)。

彼の起点は条約改正にある。その前提をなす彼の世界認識はあるいは当時(あるいは幕末期以降持続された)の典型的な西力東漸観であった。長引の煩に耐えておきたい。

「然れども、ここに絶世の大難ありて国家の前途に横はれるものは何ぞや。外国の関係是なり、夫今日の天下は既に昔日の天下にあらず、東西の二球は混じて一となり、大塊の表面は悉く群雄の瓜分割拠する所となれり。英吉利の版図は『ジブラルタル』『スエズ』新嘉波の海峡を越えて直に香港の東に逼り、印度濠洲の独り其の外底たるのみならずして、顧て加拿太一帯の地方を見るも亦た其有にあらざるはなし。巨文嶋の占領は縦令其目的を達せざりしにせよ、太平洋鉄道の落成は敵国をして一步を我に近かしめたるの実ありと云べし。／新希尼亞既に独逸に挫け、安南已に仏蘭西に入る。況や魯細亜の浦潮斯德港を開き、西伯利亞鉄道を敷かんとするあり。樺太既に彼に奪は

る。蝦夷豈に虞なしとせんや。況や支那の軍備を拡張し漸く富強を謀るあり。朝鮮將に彼に折れんとす。琉球豈に憂なしとせんや。苟も優勝劣敗の化に依じて弱肉強食の禍に免れんと欲せば、之に処する所以なかるべからざる也。」(8～9ページ)

「優勝劣敗・弱肉強食」の世界政治ダーウィニズム観によって、条約改正を外国に「依頼」する主義を彼は完璧に否定する。さらに、「保持の主義は変じて依頼の主義にな」るのだから、「其意巧なりと雖も遂に行ふべからざる」ところに結ぶ。そこに《自立の基礎》としての「国民各自の富強」論が浮きでないわけにはゆかない。すなわち、「且や将来宇宙の間に各人種の生存競争を激生し縦令戦旗を翻へして相闘ふには至らざるも勞力市場の軋轢にして漸く激烈なるに及ばば依頼主義の到底国家の生存と与に兩立すべからざるや明かならん。夫優勝劣敗は天地自然の大法にして弱肉強食は人生現有の通勢なり。故に国家の生存を永久に保持せんと欲せば、国民各自を富強ならしめ以て自立の基礎を鞏ふせぐるべからず。」(17ページ)

この富強・自立策こそが彼の「商業」論の中核を占める。移住が制約され出稼ぎまた規制される傾向強しとみる彼が積極貿易(「働掛けの貿易」)を唱道するのは、閉塞状況打破以外の何物でもない(この閉塞打破の方途こそが帝国の運命選択であったのである)。「試みに一步を譲り移住の権利は蹂躪すべし、出稼の自由は压制すべしと断定するも、国家を富強ならしむるの術は商業を振起するに在りとの一事に至りては、何人も之を否とする能はざるべし。吾人が見る所を以てするも国家の富強は徒らに土地人民の広狭衆寡に由るものにあらず。苟も文明の利器を利用して之を多数の人力に換へ、苟も能く渺茫たる大海の水を利用して之を吾人が版図となさば、小も亦た以て大に敵すべく、寡もまた以て衆に敵すべきの理あるは毫も疑ふ所なし。」(18ページ) ここには徹底的な経済主義があり貿易立国論がある。だが、優勝劣敗・弱肉強食を「天地自然の大法」、「人生現有の通勢」と認めるかぎり、それは武力を背景とする立国論でなければならない。ここに彼の海軍拡張、100隻艦隊海軍論が提出される必然がある。それを充当する敗政論はここでは紹介する必要はない。むしろ、彼の貿易立国を保証するのがひとり軍備拡張にあるのではなく、西欧列強が侵略をいまだ意図していない「新版図を拓く」ことにより、帝国日本立国の基底を考察しているところに、後の共栄圏の原型をみたい。

彼が構想した「新版図」のデッサンはこのように措定されている。「我国をして永久に其独立の体面を保持せしめんと欲せば、天然の地形が之をして然らしむるが如く、北北極の固によって南南極の利を控え、歐洲の諸国と同じく緊要なる植民地を有し、東洋の形勝を扼して之と犄角せざるべからざるべし。詳に之を言ふときは、北に魯領浦潮斯德港、黒龍江の地より『サガレン』『カムサッカ』の諸処に至るまで尽く魯国の日本海に瀕する侵地を復し、天然北極の冰雪を以て我が後面の備へとなして永く北顧の憂を絶ち、南は東印度諸嶋を経略して英領新嘉波の峽門を奪ひ、赤道線辺遠く南門の防禦線を張って以て金甌を固守せざるべからず。」(28ページ、強調=内山)

しかし、この新版図の一部はすでに「天下最後の国」であるロシア・イギリスが握っているのだから、新版図達成のためには「<sup>(ママ)</sup>近急の要務」からはじめなければならない。菅沼の「経略」はかく

して東アジア連盟論として提起される。つまり、「東洋を連結するの雄図」であり、その第一は支那・朝鮮である。その場合、支那は「好隣国」であり、朝鮮は「我国と支那との境界に在て恰も万里の長城」なのだから、「支那を取ることの不可」、「朝鮮を取るも亦た不可」とする主張になる。

「現在にも未来にも吾人の大敵たるべきものは即ち白哲人種なり」なのだから、支那・朝鮮は徹底的に援助しなければならない。すなわち、「吾人にして白哲人種と拮抗して共に其鋒を争はんとするには、支那を引て援とするの最も安全にして利益多きに如くものあらざるべし。支那に堅牢の軍艦多けれども、之に乗組むものに乏しくば吾人往て之に乗るべし。支那に壮大の互卒多けれども之を訓練するものに乏しくば吾人往て之を練るべし。天下豈に此の如き好隣国あらんや。然るに吾人が徒らに豚尾を敵視して碧眼黄鬚を親交する所以のもの豈に亦た甚だ異ならずや。」(30ページ) また朝鮮については、「吾人は寧ろ雄偉卓犖の士が躍て朝鮮に入て其政府を翼賛し、国政を整理し兵備を完修し、北魯に当り、西支那に当り、岷然として実に我国万里の長城たらしむるの策を講ぜんことを希望する也」(31ページ)とする。

これを介入・干渉ととるか援助と考えるか、その評価は分れるところであろうが、少なくとも、日清戦争が「支那を取る」列強による分割への参入であり、日韓併合にいたる国策が菅沼の日本立国論と背馳したことは確実である。つまり、日朝支の東アジア連盟は、福沢諭吉のそれと同じく、日本が西欧列強に伍し連携しつつも自己の存在を危うくしかねない、その過程に敵乎として存在した選択肢であった。(もちろん、この選択肢が当時の支那・朝鮮両国の富国強兵策が日本と同質の歴史的志向を共有する限りでしか意味をもちえなかったことも確実ではあるが) 菅沼の目は暹羅にまでのびる。安南はフランスのビルマはイギリスの手中に帰した以上、東洋の独立国暹羅もまた東アジア連盟のメンバーでありえた。その構図は、「暹羅の一国にして実に真の独立国となり以て支那の南に屹立し、朝鮮の一国にして実に真の独立国となり以て支那の北に屹立せば、この二国は支那と其土壤を接し、反対の利益を有するものなれば、我国が決して其国を奪ふの意なく、其国を助けて共に支那に当らんとするの策なることを知らば、其我に親て支那に敵するや知るべし。果して然らば支那は我股掌の上に在り矣。況や朝鮮にして以て援とするに足らば、魯を挫て以て北極の固を復するに於ても大に利する所あるをや。暹羅をして以て助とするに足らば、英を破て以て南洋の利を占むるに於ても大いに益する所あるをや。」(31-32ページ)

朝鮮をもって支那にたいする万里の長城、暹羅をもって支那の南をおさえるのでは、まるで支那にたいする日本防衛線の結成である。しかし、明治21年当時の支那が大清国であることを思えば、地政論的に言えば日朝支の対ヨーロッパ東アジア連盟は同時に対支連盟を内包しなければならなかったのである。だからこそ、「我国にして若し支那を破らんか、其邦土は四分五裂して魯独英仏に割かるべし。我国亦た其一分を得べしと雖も魯独英仏にして既に彼の中原を奪わんか、東洋の命脈は朝夕を待たざるに至らん」(30ページ)との観測が菅沼をみたしていたのである。

こうした諸条件によって「東洋を連結する雄図」があればこそ、「太平洋の西、印度洋の東、支那海の南、大洋洲の北数多の嶋嶼相群れる中にある」帝国日本の新版図を見透すことができたのであ

る。しかし、菅沼の「雄図」は、帝国日本を後見者としたアジアの独立諸国の相互牽制（バランス・オブ・パワー）関係によって西力東漸を阻止し、帝国日本はそこに生じた国家的自由を駆使してすでに“奪われたるアジア”を略取する日本中心主義を前提としていた。それはまさに帝国エゴイズムであったのであり、後の共栄圏の原理に直結する性質を十分に備えた南論進であった。

さらに、「新版図」に所属する“嶋嶼”をとった後「阿蘭陀の領する爪哇『スマトラ』の諸嶋を取り、然して後暹羅を助けて英と一戦し、『マラツカ』半嶋を復して新嘉波の峽門を扼し、然して後朝鮮を助けて露と一戦し、満洲の全域を復して浦潮斯徳、『ニコライスク』樺太、東察加の嶮要を占め、然して後朝鮮暹羅を約束して支那の頭尾を箝制し、苟も機会あらば台湾の一嶋を略取して彼が海上の威権を抑へ、勢禁形格して我に従はざる能はざらしめ、以て東洋の覇国たるは夫この策にあるのみ」(34-35ページ)と拡大されれば、これはびたりと大日本帝国が後に展開した“日本のアジア”に符合している。

しかも、新版図獲得のタイミングたるや「不争の時に乗じて不争の勢を成すべし」とし、「歐洲の密雲將に雨らんとするや近し矣。忽にして霹靂一声天泣き地哭し、山川崩騰蛟龍大陸に東西馳走して糞土を争ふの時は、即彼等が力量の互消し尽くるの日にしあれば、吾人起て海外の新版図を収むるも彼安んぞ之を争はん。是豈に不争の時にあらずや」(35ページ)と機をさだめているのは、第一次大戦を好機とした大正3年の対華21カ条要求をまざまざと思わせるものがある。

菅沼の論議と志操が攘夷的開国の志士に発現しているがゆえに、徹底的に国家主義的な発達と発展に結んでいることは言うまでもない。それは防衛と攻撃を同時に包摂しその矛盾を何とかして統一する経略であったがゆえに《夢物語》として書き述べられねばならなかったのである。その論旨が素朴であり志操劇烈であるがゆえに、当時の志士の気分がそこに横溢しているとも言えよう。だが、第一次世界大戦を経験するにいたれば、その素朴劇烈は世界の大勢の中で修正されねばならなくなる。たとえば、満川亀太郎は明治28年の三国干渉を、「実に私に取って物心の附いて以来、歐洲が亜細亜に加へたる脅迫の最初のものであり同時に最大のものであった」として、三国干渉が日本とヨーロッパ列強との関係ではなく、ヨーロッパ対アジアの問題と認識したのである。「歴史で読んだ印度や安南の亡国よりも、目の当りの三国干渉の方が遙かに強き印象を与へる。然もそは三国が単に日本に干渉して清国に還附せしめたものならば猶恕すべし、日本より奪って露西亞が直ちに之を占拠せしと前後し、威海衛も膠州灣も列強に奪はるるの惨事を見しに於て、日本清国共に明白に亜細亜に加はる歐洲勢力の脅威に会ったのである。」(2ページ。強調=内山)

そこには、かつて構想されていた西力東漸の防衛線として東アジア連盟を解消せざるをえず、日本即アジアへの認識の転換点が動いている。あるいはアジアを代表する帝国日本の歴史的意義を深切に理解しない清国の危機感の欠落をこそ危機とする情念がみなぎっているというべきか。「斯くも歐洲より輕侮せられたる亜細亜諸邦夫れ自身の罪も亦尠からぬ」とする表白がそれを示している。だが、アジア代表としての帝国日本認識は、「現代亜細亜史に最も重要な出来事は日露戦争及び日本の歐洲戦争参加」であり、「此両者は亜細亜が歐洲支配に対する挑戦に外ならぬ。日本の第一

の目的は東方亜細亞に於ける露獨の勢力を駆逐するに在った。最後の目的は亜細亞に君臨する全歐洲の勢力の駆逐に存する」(4ページ)と確かにするはずである。

それを支えたく世界の大勢こそ、第一次大戦によって触発され、W・ウィルソンの14カ条に凝結した「解放」のテーマであった。満川はそれをこう受けとめている。「有らゆるものに超越して最も大なる意義を人類文明史上に結集したるものは解放の運動である。富の圧迫より免かれんとする社会運動、力の強迫より解放せられんとする民族運動、世界は今や此の二大運動を中心として新たなる歴史を創造すべく、恐るべき大渦を成しているが、仮令その過程に於て如何様に紆余曲折があろうとも、帰着する所は必然に世界の一大更新でなければならぬ。社会人類の解放でなければならぬ。」(2ページ)

この民族解放が民族自決に支えられていることは言うまでもない。自決原理による解放と言ったとき、そこにはリベレーションとエマンシペーションの位相がなお明確に析出されないままに混在している。あえて言えば、エマンシペーションはリベレーション(自由化)を媒介としつつ、限りなく個人・個性の発現にむけられる、と言えるのではないか。あるいは、自由が先駆することで平等の実現がそこに含意されてはいないのか。とすれば、自由化の主体としてあらゆるありうべきものがそこに予定される。ロシア革命がヨーロッパにひきだしたのは、一つは民族自由化であり、さらに一つは個人の解放であったし、アジアにあっては帝国日本の自由化であった、とは極言であろうか。だが、それはヴェルサイユ体制という連合国体制によって国際権力的に包摂された上での、つまり、パワーポリティクスを大前提とするグローバル・システムでもあった。

満川が「翼くば舊套を脱して、所謂新人も舊人も解放の哲理の上に立つ亜細亞問題を直観せよ」(4ページ)と言ったときの直観とは、こうした異なるレベルでの強権的制約と自由化、平等化を渾然たるままに内包するものではなかったろうか。しかし、こうした渾然たる漠然さは了解の幅を拡大することもたしかである。だからこそ、自分の了解が人類文明史によって正当化されるのだ、とする主張が成立するのである。おそらくそこでは、帝国日本がアジアをひきさげて解放世界に参加する姿を想定していたのであろう。「支那革命」がその限りで生命解放の躍動であっただろう。「支那亡ぶれば、九億の亜州同族を白人の圧虐より解放せんとする大運動も茲に大なる蹉跌を見る」(7ページ)とするのも、また解放の文明の大道にほかなるまい。ここに東アジア連盟から大アジア主義への転轍点がある。その起点は「支那問題」を日本問題として交接させるところにある。

「支那問題は既に単なる支那の問題に非ずして帝国の問題なり。支那を目するに他国なりとし、支那問題を目するに支那問題なりとする時には、支那及支那問題は明らかに対手関係を構成す。之を帝国よりする支那保全と、欧米諸国よりする支那保全とは意義自ら相同じからず。従て欧米諸国に於て支那問題というは所謂『対支』問題に外ならざるなり。何となれば此等諸国は如何に其外観を装ふとも、支那に対して自国の勢力扶植者たり、利権獲得者たり、窮竟支那分割者たることは已むを得ざる所なればなり。帝国は支那問題を取扱ふ上に於て自ら列強と異り、最早支那を他国なりと目する能わず、支那問題を支那の問題なりと解する能はず、於是乎『対支』の二字



は何等の意義と權威とを有するものに非ざることを信ず、蓋し支那は帝国の对手者に非ずして、  
对手者は支那を对手者とす列強たるべき理路に到達すればなり。」(9ページ、強調=内山)

この行論からすれば、帝国日本は支那を飛びこして、あるいは支那を無視してヨーロッパ列強に  
対峙しているかのようである。しかし、少し読み込めば帝国は支那と対立しそれに対処してはなら  
ないのであって、敵対しているのはヨーロッパ列強なのだ、とする認識に力点がおかれていること  
が分かるだろう。それは支那分割において列強と角逐しているのではなく、分割纂奪されつつある  
支那革命をたすけその自主自立をはかることが唯一のことがらだ、とする情理なのである。「今日  
日支両国に取りて最大の急務は支那をして東洋の雄邦たるべく復活せしむるの一事に帰す」(12ペ  
ージ) ことこそが、満川のアジア解放の一念であった。そこから、《亜細亜文明の復古的理想》、  
つまり、文明思想としての大アジア主義が次のように抽出されるにいたる。

「亜細亜全局を覆へる復古的思想の空気が古代の回顧によって益々温められ、茲に所謂大亜細亜  
主義を成長保育せしめつつあることは決して疑はない。大亜細亜主義は必しも政治的外交的に全  
幅の意義を有するものでは無い。我輩をして言はしむれば寧ろ亜細亜文芸の復興である。ルネッ  
サンスである。バビロンの文明、印度の文明、漢民族の文明が再び亜細亜の天地に甦って、西欧  
の基督教文明と対峙し、世界の進歩向上に貢献するとき、大亜細亜主義は茲に完成せらるるので  
ある。」(31ページ)

文明圏としてのアジアの定礎、あるいは東洋の文明的確立、それが満川にとっては、ありうべき  
“奪われたる亜細亜”の解放であり独立であった。

## 2 脱亜入欧から脱欧入亜へ

東アジア連盟と大アジア主義とを点綴することで、明治・大正の《アジア》をとりだしたのだが、  
そこでは支那は強国としての脅威源であったにもせよ、あるいはすでにヨーロッパ列強に“奪われ”  
分割されているにもせよ、依然としてその独立を保全し援助することで提携してヨーロッパに対抗  
すべき存在であった。しかし、昭和時代になると、支那そのものがアジアのヨーロッパ化の先兵にな  
って、アジアの軸たる帝国日本に敵対している、という認識が拡充されるにいたる。つまり、日清戦  
争を発現した朝鮮問題は、欧米の東亜侵略以外の何ものでもなく、したがって日支は提携して欧米に  
当るべきなのに、逆に支那は日本に敵対するという誤る選択をしたのだ、と規定されるのである。

たとえば大川周明は、日清戦争が日支戦争を表装とするも、その実はヨーロッパの東亜侵略にた  
いする第一次攻撃であり、「日本は欧羅巴侵略主義の手先たりし支那に対して、武力的抗議を敢行し  
た」(22ページ) ものであり、日露戦争は第二次反撃であり、「亜細亜諸国の覚醒を促す警鐘」だと  
確定する。「そは一つの世界に対する他の世界の勝利である。そは亜細亜が屈辱を忍べる数世紀を  
抹殺せる復讐である。そは東洋の覚醒しつつある希望である。そは多年に亘りて他の人種に無造作  
に勝誇りし呪はれたる西洋人種に対する最初の打撃である。」(30ページ)

このように点綴する限り、帝国日本とアジア解放は少なくとも理想的には連続している状況がある。たしかに日清戦争は三国干渉をまつまでもなく、帝国日本の勝利が列強の支那分割を促進したことは菅沼貞風の予見通りであり、日本は大陸から放逐された。しかし日露戦争は戦費調達にしても戦争終焉にしても、欧米の支援なくしては達成できなかった。白哲人種帝国ロシアと戦いながら、白哲人種と提携するのでは、すでにアジアの解放は大きく後退し、むしろ白哲人種世界加入を許されることで帝国日本の維持保全が計られた事実が、ここでは意図的に削除されている。

したがって、第一次大戦——大川に言わせれば「欧羅巴の内乱」——になぜ参戦したかは明らかにされない。つまり、世界はまさにアジアを包摂して国際社会を形成しつつあったのであり、帝国日本の動向はまさにその国際社会成員としての責務を負うべき位置にあることを客観的に承認しなければならなかったのである。にも拘わらず、第一次大戦後の国際秩序の核たるべき国際連盟は、「世界戦争に於て失ふところ最も少なく、得るところ最も多しと考へられたる日本を抑圧することを以て、第二の重大なる目的」(37ページ)と被害的に受けとめられた。第一の目的とは「弱体無力のドイツの礎の上に、欧羅巴平和の殿堂を築かんとせるもの」である。

国際社会における帝国日本が「抑圧」され続けたとする実感は、過去への反省をうながした。反省ではあったが、反省の行先きが問題なのである。以下、大川に語らしてみよう。

「日露戦争は欧羅巴世界制覇の歩みに最初の一撃を加へ、且そのために亜細亜の覚醒を促せることによって、やがて来るべき世界維新の序幕なりしに拘らず、日本自身は遺憾ながら其の世界史的意義を悟らず、寧ろ世界史の根本動向と背馳する方向に国歩を進めた。日本のロシアに対する勝利に感激し、頓に心を傾け初めたる亜細亜の諸民族に対して、日本は之を愛護し指導し鼓舞する代りに、却って其の世界政策に於いて歩調を欧米に合せることにのみ苦心した。」(42ページ)

「日露戦争以後の日本の国歩は、世界史の根本動向と異なる方向に進められた。ロシアと戦ひ勝ち、表面皮相ではあり乍ら世界第一等国の班に入るに及んで、是迄張りつめ来れる国民の心の弦ゆるみ、沈滞苟安の風潮、漸く一世に漲り初めた。かくて日露戦争に於ける勝利によって、亜細亜の諸国に絶えて久しき復活の血潮を漲らしめたに拘らず、日本は却って彼等を失望せしむる如き方向に進んだ。日本は亜細亜の友人又は指導者たる代りに、その圧迫者たる欧米に追従したのである。」(59ページ)

これを端的に表現すれば、脱亜入欧の誤りを知って脱欧入亜へと転換する機をえたのだ、ということになる。その誤まれる進路を正したものが「満州帝国の建設」だとされる。このポイントはどう読んでも分からないのだが、大川がひいた関東軍参謀長の説明「第一段に於て王道満州国の完成であり、次に来るものは東亜各地の被圧・被征服民族を解放して、逐次王道楽土を建設する」プログラムなのかもしれない。「満州建国は、日本が亜細亜抑圧の元凶たる英米との協調を一抛し、興亜の大業に邁往し初めたものとして、まさしく維新精神への復帰である」(58ページ)となると、この入亜はアジアの日本化以外には考えられなくなるはずである。

この脱亜から入亜への帝国日本の歴史過程を、私たちはどう評価したらよいのだろうか。入欧も

またアジアを犠牲にしたのだし、入亜もまたアジアの日本化を意図している限り、犠牲者はすべてアジアとアジア人でしかなかった。林房雄のように、東亜百年戦争と名づけて幕末から昭和20年までを、一挙に民族＝アジア戦争とでもおこなければ、この転変は覆いようがないはずである。

上山春平の場合は、このような無暴な一挙性には当然のことながら組しない。彼は大東亜戦争を「植民地再編成をめざす戦争」とする。さらに、「私はやはり、あの戦争は侵略戦争であり、その目的は完全に失敗に終わったと見るべき」(64ページ)とし、「要するに、林氏は、戦後のアジアにおける民族解放の事実を大東亜戦争の目的の達成とみているのであるが、私は、逆に、目的の挫折の結果とみるのである。白人によるアジア人の支配は植民地化であるがアジア人によるアジア人の支配は植民地解放である、とでもいった考えを前提にせぬかぎり、明治以降の日本の膨脹過程を植民地解放の過程とみなすことは困難であり、その侵略行為を解放戦争とみることは不可能である。」(66ページ) 私はこの指摘にほぼ全面的に同意する。一点だけつけ加えるならば、J・M・マキが言った、「日本の場合には近代化ということは民族の安全を意味した」(ロジンガー編、379ページ)の含意の重みと深さである。

## おわりに

「成功した近代化は日本に侵略的な外交政策を採用させることになった。それは国際関係において民族の目標を追求する手段として、軍事力を使用することに基礎をおいた外交政策であった。このようなことになったのは、19世紀の末に、国際関係では力は正義なりとの信念にもとづいて主として動いていた世界に突如として日本が入りこんだことが一つの理由であったが、そればかりでなく日本社会の伝統、殊にその指導分子の伝統が軍事力の使用を是認したのによるものである。」(J・M・マキ、ロジンガー編、380ページ)

この指摘の強調する“軍事力使用の伝統”を日本のリーダーたちの思惟の構造から説き明かす作業はいまだに十分に行われてはいない。それこそまさに政治史と政治思想史とが交又する領野で説明さるべき問題であろう。私がここでとりあげたのは、今なぜ第二の太平洋戦争、つまり、民族解放戦争と規定すべき太平洋戦争論が国際学会レベルで日本人学者から提起されたのか、そしてまたそれをうけた著書が公刊されたのか、という疑問にさいなまれたからである。かなり大部の信夫清三郎の著書は、だが提起した問題を証明する点では失敗している。略言すれば、アジアの諸民族の中には、いささかの期待を帝国日本にたいして抱いたものもある。それは事実だ。しかし、彼らがすべて日本軍への協力、しかも日本軍の強権的・絶対的命令系統下において戦闘協力を強制されたとき、《民族》は絶対に日本を直接の媒介とする解放を志向しなかった。

たしかに多くの軍人や民間人が、民族解放に努力し、あるいは協力したことは事実である。しかし、入亜した帝国日本が<神国日本>であるがゆえに、日本の国家神道や日本語を強制し、彼らを皇国化し皇民化しようとした事実は断じて《民族》的ではないのである。つまり、アジアの諸民族

のそれは民族的アイデンティティの剝奪であり、民族の否定だけがそこに聳立しているのである。だからこそ、「<神国日本>を支える独特な天皇制国家の宗教イデオロギーに着目するとき、それがもともと<解放と共栄の思想>などではなく、逆に本来的に<呪縛と支配の思想>であった」（鈴木静夫・横山真佳編、100ページ）とする指摘が、海外神社の陸続たる設置の事実をともなあって、民族解放の虚偽の重さを私たちに衝迫するのだ。したがって、「<まつろはぬ>異族を次々に征服していったとされる神武東征神話を彷彿とさせる」（鈴木・横山編、106ページ）と状景化されれば、そこには白人植民支配者と同時に原住民族をも武力征服する原景があぶりだされる以外にはない。

<追記> 私もまた大東亜戦争を戦った。それが太平洋戦争であるとされ、第二次大戦に拡充され、あるいは日米戦争に特殊化されうることを今では知っている。たとえどうそれを規定するにしても、敗戦は私の無知を明らかにした事実は消しようがない。無知のまま死ななかつたことは、それを知らねばならない、ということを私に強いた。それを知ることが私は専門にはしなかつた。それは私が死ぬまでかかざらねばならぬ、私のつとめであるだけである。しかし、私とは異質のこだわりをもつ人たちが、はっきりとあらわれはじめた。無知のまま聖戦、つまり、大東亜解放戦争と思ひこんでいる人たちとは私は無縁である。だが、歴史的に厳密考証的に解放戦争論をもちだされれば、それは私がいま生きていること、そして死んでゆくことに障ってくる。それはどうやら東京国際軍事法廷における戦犯裁判とかかわりがある。それを「勝者の裁判」と規定することと、その勝者が帝国日本戦犯を告発したのと同じの罪科をその後に関した事実とを完全につなぎ合わせる作業が大東亜戦争再評価のバネになっているのではないか。だとしても、私はやはり私たちが大東亜戦争のネガティブな評価を日本近代に突きとめてゆきたい。それは、今後も依然としてありうべからざる人間の罪科を立証し明証する糧だからである。本稿が、私の書くはずのないものであるだけに粗雑であり、その分だけ、かつて学徒兵の海軍士官として大東亜戦争を戦わねばならなかつた中村勝己さんにむけられた、その私の想いを受けていただきたいと切に思う。

#### 参 照 文 献

- [1] 家永三郎『太平洋戦争』（岩波書店、1968年）。
- [2] 入江昭『日米戦争』（中央公論社、1978年）。
- [3] 上山春平『大東亜戦争の遺産』（中央公論社、1972年）。
- [4] 大川周明『大東亜秩序建設』（第一書房、1943年）。
- [5] 大谷健、書評『「太平洋戦争」と「もう一つの太平洋戦争」』（朝日新聞、1986年2月19日）。
- [6] 菅沼貞風『新日本の凶南の夢』（岩波文庫版、1942年）。
- [7] 鈴木静夫・横山真佳編『神聖国家日本とアジア』（勁草書房、1984年）。
- [8] C・ソーン、市川洋一訳『太平洋戦争とは何だったのか』（草思社、1989年）。
- [9] 林房雄『大東亜戦争肯定論』（番町書房、改訂合冊版、1982年）。
- [10] 満川亀太郎『奪われたる亜細亜』（広文堂書店、1921年）。
- [11] J・K・ロジンガー編、日本太平洋問題調査会訳『現代アジアの展望』（岩波書店、1953年）。

（法学部教授）